Japanese Journal of Applied Psychology
1987, No. 12., 23-30

原　著

企業従業員における「生きがい」方程式について

暫　江　清　志*　岡　和　夫**

THE EQUATION OF THE CONSCIOUSNESS OF "IKIGAI" OF EMPLOYEES IN ENTERPRISES

Kiyoshi HORIE*, Kazuo OKA**

The purpose of the present study was to construct the equation of the strength of the consciousness of "Ikigai" of employees in enterprises.

The Ss were 1,822 employees in 6 enterprises.

The hypothesized equation was the following equation.

$Y = V_1X_1 + V_2X_2 + V_3X_3 + C$

(Y: the strength of the consciousness of "Ikigai" in "life"; X_1: that in "job"; X_2: that in "home"; X_3: that in "spare time"; V_1, V_2, V_3: coefficient; C: constant)

The equation was constructed in the multiple regression analysis.

The results were as follow.

The hypothesized equation was approved in all of 31 groups of Ss.

Therefore, it was concluded that the strength of the consciousness of "Ikigai" in "like" was consisted of the summation of those in "job", "home", and "spare time" in the form of the multiple reqression eguation.

目　的

本研究の目的は，企業従業員における「生きがい」方程式を作成することである。

生きがいの意義

見田（1970），神谷（1966）によると「生きがい」という言葉は日本語にしか存在しないという。ということは，生きがいへの問は日本人にしか存在しないことになる。生きがいが人間が精神的存在として生きていくための前提条件であり，いわば精神のパンであることを考えるとき，生きがいの問題は我々日本人１人１人にとってとくに重要な課題である。また，個人が１人の従業員として企業において労働に従事するとき，彼のトータルな生きがいは彼の労働意欲を規定することになる。従業員の労働意欲は今日的状況においてはとくに生産性の直接的規定要因になるので，生産性を重視する経営側にとっても従業員個々人の生きがいは重要な課題となる。

生きがいの対象

見田（1970）は，現代日本人の生きがいについて論じ，生きがいを仕事の生きがい，家庭の生きがい，余暇の生きがいに分類している。

企業従業員の場合，彼の行動（生活）空間は，職場・家庭・それ以外の場所の３つに大別される。そして，それぞれの場における彼の行動が志向される対象は仕事・家庭（家族との交流を含んだ家庭生活の対象としての家庭）・余暇(余暇活動）である。それゆえ，企業従業員の

* 名古屋工業大学生産システム工学科
Department of Systems Engineering, Nagoya Institute of Technology
** 名古屋工業大学生産システム工学科
Department of Systems Engineering, Nagoya Institute of Technology

生きがいの対象を彼の生活空間という次元より大別すれば，仕事・家庭・余暇の3つに分類される。そして，それぞれの対象に対して彼が抱く生きがい意識（どの程度「それ」に対して生きがいを感じているかという意識）の総和として彼が彼自身の人生に対して抱く生きがい意識が決定されると考えられる。

生きがい方程式

人生の生きがいが前述のように仕事・家庭・余暇の3つの「生きがい」が何等かの形で集成されたものと考えるならば，ここに生きがい方程式を考えることができる。本研究では，企業従業員の生きがい意識においてこのような方程式が成立するか否かを検討することを目的としている。

ここでは，重回帰分析による重回帰式でさし当って単純に一次式の形で生きがい意識を表現することを試行するものである。すなわち，$Y=V_1X_1+V_2X_2+V_3X_3+C$ という形で表現することが可能か否かを検討することを目的とするものである。

ここでは，人生の生きがいが従属変数「Y」として捉えられている。仕事・家庭・余概のそれぞれの生きがいがそれぞれ独立変数X_1，X_2，X_3 として捉えられている。そして，V_1，V_2，V_3 は，それぞれの独立変数にかかる係数であり，Cは定数である。

実測値に対してこの式をあてはめ係数を導入したときに，係数が正でかつ有意（係数が統計的に0でない）であること，そして，この回帰に意味がある（分散分析によるF値で判定）ときに，生きがい方程式が成立するといえる。

仮　説

前述のことから，以下の仮説を説定した。

仮説：人生の生きがいが，仕事・家庭・余暇のそれぞれの生きがいの総和として表現されるならば，前述の生きがい方程式 $Y=V_1X_1+V_2X_2+V_3X_3+C$ が成立する。

という仮説である。以下においてこの仮説を従業員の個人的属性との関連において検討する。

方　法

1.　対象者

調査対象者は，下記の6つの企業の従業員であり，合計1,822名（男子1,221名，女子601名）の従業員から資料を得た。

K社：愛知県豊田市に本社があり，自動車部品を製造している企業である。調査は1978年に行なわれたが，当時の従業員数は約900名であった。577名（男子342名，女子235名）の従業員から資料を得た。

A社：愛知県名古屋市に本社があり，通信機器を製造している企業である。調査は1979年に行なわれたが，当時の従業員数は約400名であった。378名（男子294名，女子84名）の従業員から資料を得た。

S社：岐阜県岐阜市に本社があり，電気機器を製造している企業である。調査は1982年に行なわれたが，当時の従業員数は約450名であった。384名（男子297名，女子87名）の従業員から資料を得た。

N社：愛知県名古屋市に本社があり，コンタクトレンズを製造している企業である。調査は1983年に行なわれたが，当時の従業員数は約400名であった。353名（男子210名，女子143名）の従業員から資料を得た。

H社：愛知県名古屋市に本社があり，紙製品卸問屋である。調査は1983年に行なわれたが，当時の従業員は約100名であった。70名（男子44名，女子26名）の従業員から資料を得た。

T社：愛知県西春日井郡に本社があり，襖紙を製造している企業である。調査は1984年に行なわれたが，当時の従業員数は約70名であった。60名（男子34名，女子26名）の従業員から資料を得た。

企業別と6つの企業を合計したものとの両方について結果を整理したが，本論文では，6つの企業の従業員を合わせた場合の結果についてのみ「結果」の項で報告する。

2.　調査票

以下の内容をもった調査票によって調査を実施した。

「以下のものに対してあなたはどの程度生きがいを感じますか。その程度にしたがって評定点をつけて下さい。」という質問内容で，10点満点の10段階評定（「1」:「全然生きがいを感じない。」；「10」：「非常に生きがいを感じる。」）で，仕事・家庭・余暇の生きがいの3つの対象に人生を付加した4つの対象の各々に対して評定させた。

3.　個人的属性

調査票の表紙に以下の6つの属性の各々についてその水準（段階）を記入させ，分析のときの要因を得た。

①性：この属性では2水準を設定した。1．男子；2．女子

②年齢：この属性では9水準を設定した。

1．20歳未満（以後20未と略記する。）；2.20歳以上・25歳未満（以後20・25と略記する。）；3．25歳以上・30歳未満（25・30）；4．30歳以上・35歳未満（30・35）；5．35歳以上・40歳未満（35・40）；6．40歳以上・45歳未満（40・45）；7．45歳以上・50歳未満（45・50）；8.50歳以上・55歳未満（50・55）；9.55歳以上（以後55上と略記する。）

③勤続年数：この属性では7水準を設定した。

1.3年未満（以後3未と略記する。）；2，3年以上・5年未満（以後3：5と略記する。）；3，5年以上・10年未満（5・10）；4．10年以上・15年未満（10・15）；5．15年以上・20年未満（15・20）；6.20年以上・25年未満（20・25）；7．25年以上・30年未満（25・30）

④学歴：この属性では4水準を設定すした。

1．中学校卒（以後中学と略記する。）；2．高等学校卒（高校）；3．短期大学卒（短大）；4．大学卒，大学院卒（大学）

⑤地位：この属性では5水準を設定した。

1．パートタイマー（以後パートと略記する。）；2．一般（一般）；3．係長クラス（係長）；4．課長クラス（課長）；5．部長クラス以上（部長）

⑥職種：この属性では4水準を設定した。

1．技術職（以後技術と略記する。）；2．事務職（事務）；3．営業職（営業）；4．技能職（技能）

4．手　続

調査は留置法によって実施した。調査票を配布してから回収までの期間は約2週間であった。

結　果

表 1　属性別有効回答数

属　性	水　準	回　数	属　性	水　準	回　数
性	男　子	1,208	年数	20.25	71
	女　子	583		25.30	21
年齢	20　未	81		30上	3
	20.25	300	学歴	中　学	471
	25.30	388		高　校	664
	30.35	370		短　大	145
	35.40	217		大　学	1,794
	40.45	169	地位	パート	46
	45.50	136		一　般	1,211
	50.55	75		係　長	249
	55上	53		課　長	104
勤続	3未	290		部　長	74
	3.5	352	職種	技　術	256
	5.10	524		事　務	346
	10.15	405		営　業	393
	15.20	113		技　能	712

回収された調査票のうち有効回答数を従業員の個人的属性ごとに表示すると第1表のようになった。第1表に示されたように「勤続年数」が「30年以上」は3名しかいなかったので以後の分析においては省くことにした。それで，「勤続水準」については7水準となった。

係数について

重回帰分析によって各属性における各水準ごとに重回帰式を求めその係数を表示すると第2表より第7表のようになった。

分散分析について

分散分析によって各重回帰式の有意性を検定するためにF値を求めたところ第8表より第13表に示されたようなものになった。

重相関係数について

また，各重回帰式に基づいて「重相関係数」を求め表示すると第14表に示されたようなものになった。

以上の結果より，生きがい方程式について従業員の個人的属性ごとにみると以下のことが分かる。

性について

第2，第8表より，男子，女子いずれの性においても生きがい方程式（以後式と略記する。）が成立することが分かる。また，係数がすべて有意であることが分かる。第14表より，いずれの性においてもこの式と実測値との間にかなり相関があることが分かる。

年齢について

第3，第9表より，9つの年齢層のすべてにおいて式が成立することが分かる。また，係数については以下のことが分かる。20未においては，V_1 のみ，すなわち，仕事の生きがいのみが，Yに，すなわち，人生の生きがいに関係する。30・35，50・55，55上の3つの年齢においては，V_1，V_2 がYに関係する。残りの5つの年齢層においては，係数がすべて有意である。

表 2 「性」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
男子	V_1	0.377	0.345	0.024	213.01**
	V_2	0.246	0.223	0.023	90.59**
	V_3	0.163	0.154	0.023	45.31**
	C		2.177		
女子	V_1	0.242	0.224	0.033	45.44**
	V_2	0.408	0.397	0.035	130.05**
	V_3	0.215	0.217	0.033	45.13**
	C		1.236		

STD.B：標準偏回帰係数；B：偏回帰係数；D(B)：偏回帰係数の標準誤差

表 3 「年齢」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
20未	V_1	0.405	0.352	0.092	15.53**
	V_2	0.072	0.069	0.103	0.45
	V_3	0.058	0.054	0.098	0.30
	C		3.789		
20・25	V_1	0.211	0.197	0.050	15.59**
	V_2	0.303	0.272	0.048	31.99**
	V_3	0.211	0.232	0.056	16.94**
	C		2.285		
25・30	V_1	0.346	0.340	0.043	63.91**
	V_2	0.316	0.276	0.038	52.29**
	V_3	0.159	0.159	0.043	13.86**
	C		2.026		
30・35	V_1	0.393	0.343	0.039	78.33**
	V_2	0.311	0.312	0.044	49.21**
	V_3	0.079	0.072	0.039	3.35
	C		1.944		
35・40	V_1	0.339	0.310	0.055	32.19**
	V_2	0.226	0.231	0.063	13.51**
	V_3	0.218	0.208	0.057	13.46**
	C		1.802		
40・45	V_1	0.265	0.251	0.060	17.23**
	V_2	0.442	0.445	0.065	46.77**
	V_3	0.128	0.125	0.062	4.07*
	C		1.105		
45・50	V_1	0.293	0.297	0.076	15.30**
	V_2	0.339	0.389	0.089	18.91**
	V_3	0.211	0.213	0.074	8.35**
	C		0.786		
50・55	V_1	0.312	0.357	0.125	8.24**
	V_2	0.329	0.369	0.125	8.68**
	V_3	0.118	0.121	0.102	1.40
	C		1.131		
55上	V_1	0.402	0.416	0.109	14.52**
	V_2	0.478	0.507	0.112	20.58**
	V_3	0.119	0.119	0.081	2.14
	C		−0.019		

第14表より，(55上) においては，式は高い相関を示し，残りの年齢層においては，式はかなり相関があることがわかる。

勤続年数について

第4，第10表より，すべての群において式が成立することが分かる。また，係数については，15年以上の3つの群においては，V_1，V_2 が意味をもち，15年未満の4つの群においてはすべての係数が意味をもつことが分かる。すなわち，15年以上においては，V_3（余暇）が意味をもたないことが分かる。

第14表より，(25・30) においては，式は高い相関を示し，残りの6つの群においては，式はかなり相関があることが分かる。

表 4 「勤続年数」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
3未	V_1	0.216	0.197	0.047	17.60**
	V_2	0.389	0.351	0.046	58.16**
	V_3	0.227	0.235	0.051	21.24**
	C		1.893		
3・5	V_1	0.361	0.312	0.041	57.87**
	V_2	0.264	0.228	0.041	31.08**
	V_3	0.195	0.196	0.045	18.80**
	C		2.052		
5・10	V_1	0.307	0.304	0.039	62.15**
	V_2	0.295	0.288	0.038	56.71**
	V_3	0.178	0.169	0.036	22.67**
	C		1.946		
10・15	V_1	0.424	0.394	0.038	107.93**
	V_2	0.347	0.357	0.042	72.32**
	V_3	0.082	0.078	0.037	4.61*
	C		1.156		
15・20	V_1	0.366	0.324	0.074	19.14**
	V_2	0.253	0.251	0.092	7.40**
	V_3	0.094	0.095	0.090	1.114
	C		2.162		
20・25	V_1	0.520	0.542	0.102	28.39**
	V_2	0.260	0.246	0.093	7.03*
	V_3	0.120	0.110	0.086	1.66
	C		0.815		
25・30	V_1	0.370	0.373	0.175	4.51*
	V_2	0.492	0.644	0.255	6.36*
	V_3	0.103	0.082	0.125	0.43
	C		−0.514		

学歴について

第5，第11表より，すべての群において式が成立することが分かる。また，すべての係数がすべての群において有意であることが分かる。第14表より，式はかなり相関があることが分かる。

表 5 「学歴」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
中学	V_1	0.317	0.292	0.032	63.86**
	V_2	0.382	0.389	0.038	92.88**
	V_3	0.166	0.165	0.036	21.50**
	C		0.957		
高校	V_1	0.359	0.338	0.032	110.33**
	V_2	0.284	0.273	0.033	69.04**
	V_3	0.192	0.191	0.033	34.35**
	C		1.490		
短大	V_1	0.188	0 147	0.059	6.11*
	V_2	0.345	0.282	0.062	20.71**
	V_3	0.285	0.259	0.066	15.26**
	C		2.556		
大学	V_1	0.289	0.253	0.036	50.30**
	V_2	0.329	0.276	0.034	64.37**
	V_3	0.098	0.088	0.034	6.67*
	C		3.145		

表 6 「地位」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
パート	V_1	0.350	0.360	0.088	16.82**
	V_2	0.505	0.567	0.100	32.09**
	V_3	0.319	0.357	0.096	13.87**
	C		−1.691		
一般	V_1	0.300	0.275	0.023	137.34**
	V_2	0.320	0.294	0.023	156.95**
	V_3	0.192	0.190	0.024	64.14**
	C		1.894		
係長	V_1	0.485	0.446	0.051	76.21**
	V_2	0.157	0.144	0.052	7.79**
	V_3	0.045	0.040	0.048	0.69
	C		2.758		
課長	V_1	0.549	0.549	0.084	42.65**
	V_2	0.149	0.138	0.078	3.14
	V_3	0.082	0.069	0.068	1.03
	C		1.887		
部長	V_1	0.441	0.539	0.113	22.81**
	V_2	0.267	0.325	0.125	6.80**
	V_3	0.227	0.217	0.094	5.35**
	C		−0.323		

表 7 「職種」別の係数

		STD.B	B	D(B)	F
技術	V_1	0.273	0.263	0.054	23.55**
	V_2	0.314	0.281	0.051	31.04**
	V_3	0.198	0.190	0.052	13.51**
	C		2.085		
事務	V_1	0.210	0.173	0.040	18.40**
	V_2	0.341	0.307	0.044	48.72**
	V_3	0.245	0.225	0.043	27.49**
	C		2.180		
営業	V_1	0.356	0.341	0.047	53.52**
	V_2	0.194	0.113	0.041	15.95**
	V_3	0.161	0.147	0.040	13.72**
	C		2.993		
技能	V_1	0.347	0.325	0.030	119.16**
	V_2	0.369	0.365	0.031	134.46**
	V_3	0.135	0.134	0.029	20.89**
	C		1.193		

表 8 分散分析表（性）

		DF	SS	MS	F
男子	回	3	1,168.98	389.66	169.22**
	残	1204	2,772.39	2.30	
	総	1207	3,941.37		
女子	回	3	898.30	299.43	127.14**
	残	579	1,363.67	2.36	
	総	582	2,261.97		

**：1％

地位について

第6，第12表より，すべての群において式が成立することが分かる。また，係数については，課長ではV_1のみが，係長ではV_1とV_2とが，残りの3つの群ではすべての係数が有意であることが分かる。

第14表より，式はかなり相関があることが分かる。

職種について

第7，第13表より，すべての群において式が成立することが分かる。また，すべての係数がすべての群において有意であることが分かる。

第14表より，式はかなり相関があることが分かる。

以上のことから，31群のすべてにおいて回帰式を作ることに意味があることが確認され，各群において係数V_1が有意であることが認められた。係数V_2については，

表 9　分散分析表（年齢）

		DF	SS	MS	F
20未	回	3	45.05	15.02	5.98**
	残	77	193.50	2.51	
	総	80	238.55		
20・25	回	3	234.89	78.30	28.87**
	残	296	802.66	2.71	
	総	299	1,037.55		
25・30	回	3	439.82	146.61	60.22**
	残	384	934.85	2.43	
	総	387	1,374.67		
30・35	回	3	355.37	118.46	59.63**
	残	366	727.07	1.99	
	総	369	1,082.44		
35・40	回	3	118.51	62.84	32.35**
	残	213	413.71	1.94	
	総	216	532.22		
40・45	回	3	190.63	63.54	34.23**
	残	165	306.27	1.86	
	総	168	496.90		
45・50	回	3	298.26	99.42	34.75**
	残	132	377.68	2.86	
	総	135	675.94		
50・55	回	3	111.91	37.30	13.19**
	残	71	200.81	2.83	
	総	74	312.72		
55上	回	3	163.32	54.44	35.12**
	残	49	75.96	1.55	
	総	52	239.28		

表10　分散分析表（勤年）

		DF	SS	MS	F
3未	回	3	336.91	112.30	44.50**
	残	286	721.71	2.52	
	総	289	1,058.62		
3・5	回	3	368.85	122.95	49.25**
	残	348	868.74	2.50	
	総	351	1,237.59		
5・10	回	3	526.57	175.52	69.22**
	残	520	1,318.61	2.54	
	総	523	1,881.18		
10・15	回	3	630.07	210.02	109.74**
	残	401	767.46	1.91	
	総	404	1,397.53		
15・20	回	3	93.33	31.11	14.78**
	残	109	229.45	2.11	
	総	112	322.78		
20・25	回	3	81.91	27.30	17.25**
	残	67	106.06	1.58	
	総	70	187.97		
25・30	回	3	44.08	14.69	13.04**
	残	17	19.16	1.13	
	総	20	63.24		

表11　分散分析表（学歴）

		DF	SS	MS	F
中学	回	3	816.80	272.27	113.70**
	残	467	1,118.31	2.39	
	総	470	1,963.11		
高校	回	3	715.01	238.34	98.97**
	残	640	1,541.26	2.41	
	総	643	2,256.27		
短大	回	3	111.63	37.21	16.47**
	残	141	318.62	2.26	
	総	144	430.25		
大学	回	3	98.07	132.69	66.37**
	残	510	1,019.62	2.00	
	総	513	1,417.69		

29の群において，V_3 については，22の群においてその有意性が認められた。そして，これらのことより生きがい方程式が成立することが分かった。また，重相関係数より，すべての式が実測値との間で「かなり相関がある」あるいは「高い相関がある」ことが分った。

それゆえ，仮説は実証されたといえる。すなわち，人生の生きがいは，仕事・家庭・余暇のそれぞれの生きがいの総和として表現できる。表現形式としては，$Y = V_1X_1 + V_2X_2 + V_3X_3 + C$ という一次式である。

考　察

余暇の生きがいについて

結果の項で明らかにされたが，係数V_3 は，他の２つの係数に比べて有意である回数が少なかった。このことは人生の生きがいに余暇の生きがいが寄与しうる回数が，仕事・家庭の「それ」に比して少ないことを示すも

表12　分散分析表（地位）

		DF	SS	MS	F
パート	回	3	139.23	46.41	36.86**
	残	42	52.88	1.26	
	総	45	192.11		
一般	回	3	1,383.85	461.28	177.46**
	残	1,207	3,137.50	2.60	
	総	1,210	4,521.35		
係長	回	3	210.64	70.21	37.83**
	残	245	454.72	1.86	
	総	248			
課長	回	3	84.54	28.19	25.09**
	残	100	112.34	1.12	
	総	103	196.88		
部長	回	3	94.45	31.48	19.41**
	残	70	113.56	1.62	
	総	73	208.01		

表13　分散分析表（職種）

		DF	SS	MS	F
技術	回	3	237.43	79.14	31.54**
	残	252	632.32	2.51	
	総	255	869.75		
事務	回	3	276.51	92.17	41.97**
	残	342	751.14	2.20	
	総	345	1,027.65		
営業	回	3	287.60	95.87	48.51**
	残	389	768.72	1.98	
	総	392	1,056.32		
技能	回	3	1,087.69	362.56	149.85**
	残	708	1,713.00	2.42	
	総	711	2,800.69		

表14　重相関係数

属性	項目 / 水準	重相関
性	男子	0.545**
	女子	0.630**
年齢	20未	0.435**
	20・25	0.476**
	25・30	0.566**
	30・35	0.573**
	35・40	0.559**
	40・45	0.619**
	45・50	0.664**
	50・55	0.598**
	55上	0.826**
勤続年数	3未	0.564**
	3・5	0.546**
	5・10	0.534**
	10・15	0.671**
	15・20	0.538**
	20・25	0.660**
	25・30	0.835**
学歴	中学	0.650**
	高校	0.563**
	短大	0.509**
	大学	0.530**
地位	パート	0.851**
	一般	0.553**
	係長	0.563**
	課長	0.655**
	部長	0.674**
職種	技術	0.522**
	事務	0.519**
	販売	0.522**
	技能	0.623**

のである。この意味で相対的にみて余暇の生きがいは人生の「それ」になりにくいといえる。このことは，人生の生きがいの本質的構造と余暇の生きがいの構造とを見田（1970）の説によって比較するとき理解される。

また，V_3 が有意でなかった9つのケースをみると，年齢では（20未），（30・35）と50歳以上の2群であった。勤続年数では15年以上の3群で，地位では，係長，課長であった。これらの属性の内容をみると，一般的には個人の生がトータルに職場に吸収されざるをえない状況につながるものである。したがって，これらの属性の水準にある個人は，精神的にも物理的にも余暇の生きがいに人生の生きがいを見い出せるようなゆとりがないと考えれば本研究の結果が理解できる。

回帰式について

本研究での重回帰分析では一次式による回帰であったが，これが最良の回帰であるという保証はない。二次式による回帰なども行なって比較すればより精度の高い式がえられることと思う。

人生の生きがい

$Y=V_1X_1+V_2X_2+V_3X_3+C$ は，$X_1=\frac{1}{V_1}$ $(Y-V_2X_2-V_3X_3-C)$ と変換できる。仕事の生きがいが労働意欲を通じて生産性につながることを考えるとき，経営側にとってはこの変換式の意味は重大である。なぜならば，仕事そのものの生きがいを高めることによって仕事の生きがいを向上させることが不可能な今日の生産現場を考えるとき，この変換式は人生の生きがいを高めることによって仕事の生きがいを向上させることができることを示唆するからである。そして，人生の生きがいが，日本人，日本的風土の中においてのみ可能だからである。より具体的な例を挙げると，例えば，個人が禅などの精神的修業の方法によっての内面的成熟を志向するとき，彼の人生の生きがいは向上する。このとき，この式において Y が増大するので必然的に X_1 は向上することになる。ある禅僧が流れ作業に従事する工員から人生の，そして，仕事の生きがいを回復させる方法について質問されたとき，「顔を作りなさい！」と答えたということをここに思い出す。

今後の問題

今後の問題の１つとして，個人的属性が２つ以上組み合わされたときの式を導出することが考えられる。すなわち，例えば，(40・45) の男子の生きがい方程式をである。本研究の式がより実際的な有効性をもつためにはこのことを実行することが必要であろう。いずれ後日この問題について報告したいと思う。

文　　献

1) 神谷美恵子：生きがいについて，みすず書房，1966.
2) 見田宗介：現代の生きがい，日本経済新聞社，1970.